三河アララギ

２０２３年 令和５年５月 皐月（さつき）

五　月　号

第 七十 巻　第 五 号

ニューヨーク日記（199）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

PROFESSIONAL PACKER?

Blue Shoe Diaries

丁度一年前の今日東京でお母さんのお引越しをしていました。その数ヶ月後にはニューヨークからマイアミに ShoeLady のお引越しで荷造り奮闘していたな。それで今日、今度は自分の引越しの番。ここまでしょっちゅう引越し荷物を作っているとプロ並みになった様な気がします。それでも忙しいですね。今回は猫の手も借りてみましたが特に捗りません。

A year ago today, I was moving mom's apartment in Tokyo. A few months later, I was moving my sister's apartment from New York to Miami. And today, I am packing to move myself to Miami. I've become almost like a professional packer now. But it is a lot of work. In Japan there's a saying that one's so busy that you want even your cat to lend a hand. Here is Sherlock lending me his hand as I pack his many fluffy beds and toys.

目次

第七十巻第五号（通巻八三三号）

表紙　本田つむぎ（1）
ニューヨーク日記(199)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々後集」　今泉　米子（5）
昭和61年五月号作品　大須賀寿恵（6）
昭和61年五月号作品　夏目　勝弘（7）
昭和61年五月号・六月号作品　岡本八千代（8）
形原神社　弓谷　久子（10）
宇宙空間　今泉　由利（12）
傘寿　安藤　和代（14）
八十五歳の誕生日　清澤　範子（16）
沈丁花　山口千惠子（18）
満開の　杉浦恵美子（20）
春の香り　伊藤　忠男（22）
豆板路　白井　信昭（24）
泉下の子規の送る喝采　矢崎　直人（26）
『ことよせ』　いーはとぶ
水野　絹子（28）
牧原　規惠（28）

現代学生百人一首
東洋大学
長谷部　葉（32）
渡邉　薫（32）
藤井　結人（32）
大寶　優香（32）
川口晄太朗（33）
池田　遥翔（33）
鈴木　優羽（33）
小松慎太郎（33）
植村　公女（34）
木村　歩歩（34）
今泉　如雲（35）
矢崎　直人（35）

『俳句』
稲吉　友江（29）
鈴木美耶子（29）
吉見　幸子（29）
牧原　正枝（30）
森　厚子（30）
山崎　俊子（31）
大武　智子（31）

今泉　由利（35）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（36）
五感を澄ませば(11)　杉浦恵美子（38）
附録（十一）　矢崎　直人（40）
『老い について』　中屋　保之（42）
楽しい時間（126）　山本紀久雄（44）
『酔いの徒然』（133）　丸山酔宵子（46）
「桜を讃える」　高橋　育郎（48）
絹の話（150）　今泉　雅勝（50）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（52）
初狩便り18　花野みぷり（54）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬
本田　勇気（56）
康鍼治療院　玄　翁（58）
『故郷を去らんとして作有り』
横山　精真（60）
編集室だより
今泉　由利（62）
「三河アララギ」について（64）

歌集　わが冬葵

御津磯夫

掻きあつむるわが手の軍手とほし來て冬枯れ石榴の小枝は痛い

活き着くのか枯れてゆくのかまだ不明冬の光りにそそぐ午後の水

藺草（ゐぐさ）青く匂ふ畳のわが精舎（しやうじや）今朝まだ佛も人も歩まず

かなしみを知らざりし少年の日は杳（とほ）し海邊に小さき砂山ありき

草のいのちさへさまざまに過ぎてゆく青きまま枯れし曼陀羅曼華（まんだらまんげ）

はやばやと冬のもの厚くわれは着てわれより健（た）けき老い人を診る

孟宗竹の厚き青さをたのしむとも團子の串にもならないといふを

父母にささげて桶にのこりたる水をぞそそぐ嗚呼孝婦妙覺之墓

甕の水に鵯も來りて水をのむ呑み了るまで見てゐるわれは

裏庭の杉よりたちゆく羽音あり山鳩よりも五位鷺らしき

歌集「草々後集」

今泉米子

窓下のシヤガの冬の葉ゆらゆらを見つつ十五分日光浴をする

湿温器入れたる部屋にひもすがら飽くこともなし寝椅子の上に

幾ばくを生きむ忘れて松浦漬を買ひこみて楽しこの年の暮

ゆたかなる大胡蝶蘭のま白き花と酸素吸入つづけゐる我と

新しき年を迎ふと双耳の壺に斑入青木の朱実の一枝

新しき年のはじめの朝早くロスアンゼルスよりの賀状届きぬ

またたきの間とも言ふべし昨日ありて今日なき庭の蛙手紅葉

雨垂れの雫音なく降りをりて昭和六十四年の元旦となる

あらたまの年の始めに旭日梅花双鶴林和靖の三幅対の前

父祖よりの大広口に庭の華活けてわれにも年改まる

昭和61年5月号作品

大須賀寿恵

胸の上に冷たくなりたる懐炉あり夜はほのぼのと明け始めたり

わが胸は懐炉に温もりてしばらくは喜び悲しみなき如くゐし

懐炉ふたつ背中に胸に入れながら朝の温度を今朝も確かむ

自らに温もる力乏しくて一冬離さざりしふたつの懐炉

鮮かに濃緑色に茹であがる砂糖一さじに茹でし菠薐草は

寺の庭の篁伐られてわが庭の築山の馬酔木に二羽のうぐひす

掌のくぼより洩らすことなく持ちて来て雛芥子の種子プランターに蒔く

新しき抹茶千代昔の缶あけて君が手作りの茶杓にすくふ

街に出でて自販機の前に吾は佇つ卵を買ふにも言葉は要らぬ

春雷ひとつ轟き消えてゆきにけり雨の勢ひ増すこともなく

昭和61年5月号作品

夏目勝弘

丸まりてい寝ゐる犬が白眼あけ我を暫く見上げてをりぬ

写実主義の栄ゆる時は世の中もまた栄ゆるとふ説を諾ふ

左眼の飛蚊に長き尾の出でたりハレー接近に係はりありや

坪に満たぬ庭を造りぬ坪庭といへる言葉の響きのよろし

明るきに帰りきたりて夕食をただ待ちゐるは淋しきものなり

論文の書き出し少し変へてみむナミブ砂漠のＴＶ見てより

箱叩（キャビネット）きなどして見てゐたるＴＶは音声のみとなりたり

海水と交るあたりの豊川の川面は少し盛り上がり見ゆ

手の触るれば女性の声もて刻を知らす枕元におく新しき時計

午前二時に目覚むる癖のつきにけり新しき時計に変へし頃より

昭和61年5月号作品

蒲郡　岡本八千代

久々に背広姿にて外出の夫を見送るこの春の朝

父母の御骨斂めむと思ひをりけふは花起こしの風吹きどよむ

傘に降る小雨の音をたのしみて豆腐一丁けさ買いにゆく

八千代椿とひとりひそかに名づけゐし椿の蕾はくれなゐの色

八千代椿の一つの花にひねもすの雨降りそそぎ昏れゆきにけり

弘法蟹またの名はH蟹（エッチ）ともいふと教へられつつ蟹を買ひたり

米国（アメリカ）より帰り来し人とまだ逢へず今日の夕べの速き雨足

東に満月白くのぼりはじむわれは「月下の華」を読み了ふ

つきすぎて剪り落さるる太郎庵椿花の蕾を我は拾ひ集めぬ

訓み幾つあると知りつつ音訓みに莫囂圓隣之（ばくごうえんりんし）と貝読みてゆく

昭和61年6月号作品

「羊歯の芽」をこの夜一夜に読み了へて冷たきう烏龍茶に咽（のみど）潤す

我の持つボストンバッグの底深く父母の御骨の小さき箱あり

倶会一処（くえいつしよ）と思へばなほも安らけき父母の御骨を斂め終へたり

父十七年母十三年の白骨はそれぞれ音していま納まりぬ

院主より教はり来りし大徳香瑞雲沈丁花といふ線香を買ふ

形原神社

豊川　弓谷久子

今年も雛を飾りたりとの便りあり行く事も無く四年が過ぎぬ

金魚椿の花一輪が咲き初むる子が育て来し鉢植椿

業平公が其の名を付けしと聞く椿さきがけて咲く紅深し

母逝きし春の彼岸のお中日春の雨降る一日なりき

老いてより短歌学びし母なりき心通ひき只それだけで

「心にゆとり歌詠みて見む」晩年の母の残せし一首を憶ふ

世話好きで人に好かれて友達も多くて母は幸せなりき

庭隅に木瓜の花咲きをりひつそりと故郷の山道思い出す

墓じまいのあの日より今日は三年目遠くなりたり故郷の山

桜満開のニュースは続く昨日も今日も無情の雨も降り続く

子のブラウス縫い上げにけり新しき眼鏡になりてミシンも快調

花見日和と今朝はなりをり行先はあなたまかせの家旅の花見

子に連れられて今年の花見は形原神社広き境内桜咲き満つ

昭和天皇の歌碑に遇いたり境内に続く春日山の麓にて

散り初めし桜の花を惜しみつつ今年の花見に満ち足りてをり

宇宙空間

東京　今泉由利

えぐみ苦味押え育ててをりますと但し書あり今日の小松菜

要冷蔵ダンボールの届きたり何も食べたくないと思う日

事前調理は途中で止めありと案内調理方法にて召しあがれ

極熱燗酒に泡のいでる時焼きひれ取り出しいただきます

北米とオーストラリアとカナダより集められたりグラノーラ食む

何国の何をひと口食みゐるか今朝の私のグラノーラ好き

火の球であったといふ真地球を見下ろしてゐる飛行機の窓

岩でできた惑星地球を見下ろして父母の国へ飛行中

太陽系三番目の惑星の地球に長く住んでおります

人間の身体の60～70％は水分と私はハイビスカス茶の成分多し

どうしても考えられないことにして光速30万kmといふ速さ

じっとしてみてもじっとしてゐなくても住んでいる地球は時速10万km

月までの距離の38万km私のフリーウェイ走行距離の38万km

真地球はハビダブルゾーンにしてやすらかにゐます私

太陽と共に生まれし真地球は太陽と共に死にゆくといふ

傘寿

豊川　安藤和代

伊良湖なる浜風受けて手作りの友の芋切り深き飴色

生産者の写真つきたるコーナーに父似の人の菠薐草買う

「その話昨日も聞いたよワッハッハ」笑い合う友最高の友

夫逝きて四年もなるに夫あてにカタログ届きて悲し梅の香

起き伏しの厨にひとつ玉葱の強かにしてあおき芽の見ゆ

出無精の吾は誘われ娘と行けば早春の街耳を擽る

ホルテシモの様にカラスは電線に恋人なるや動づことなし

新じゃがはホッコり旨し夕の膳まだ帰らざる孫子待ちをり

隣村の祭り幟のはためきが小さく聞こゆ柳芽吹ける

冬の間を淀みておりし用水の水面白雲ゆるりと動く

タイ産にノルウェー産にチリ産と並びし魚の目故郷を恋ふ

シャンシャンの返還の朝の空広くあまりの青さに増す寂しさよ

その足は冷たくないか春浅き水路に遊ぶ白鷺一羽

若き日の手づりバラの七宝焼き八十路の胸もと大き華やぎ

ママ、母ちゃん、母さん、母です、お袋さん、婆ちゃんとなり傘寿祝は

八十五歳の誕生日

春日井　清　澤　範　子

二月二十六日八十五歳の誕生日夫の遺影の前にてお寿しをいただく

大腸カメラが終りと思きや右足首にギブス巻直し

娘に手を引かれ縁側に出で庭椿の花めでていたり

次から次へと病がおそい来て抗癌剤の投与青色のカペスタチンをのむ

朝晴れて小鳥はチッチとなきいるに朝の食器を洗いいる時

女医の意志により暗がりの中二度目の大腸カメラ受けぬ

大腸検査前には水２ℓを二時間かけてのみ水様便の様になるまで

吾が体は娘の車で病院の車椅子に乗りかえ診察を受く

眠るまで今日の出来ごと思いおり吾最善をつくし来にけり

私の足もう歩けなくなるかも知れぬ足のくるぶしギブスまだまだ

市民病院にて大腸検査の日も決まり体調管理に気をつけるなり

市民病院に行くはその都度採血があり吾の血管細くて心配

沈丁花

豊川　山口千惠子

アパートにひとり暮らしを始めたるひな子と巡る食品売場

わが買ひし食料品のエコバッグ運びてくれし駐車場まで

モチノ木の道に散りたる葉を掃きぬ風に吹かれてカラカラ舞ひぬ

橙の果実が一つ窓の辺にダイダイ色の美しき色

槙垣の中に混りて薮椿紅色鮮やか見て通るなり

ビンに挿す薮椿の花窓辺にあり花の落ちざり三日ほど

二つづつあればことたる皿小鉢使はざるもの棚につみあり

デイケアに行き始めたる友の家門の扉の一日閉ざさる

摘みとりし菜花を茹でむと湯に放つ濃き緑色朝春めく

玄関に活けし蕾の沈丁花かほりを放つ開き始めぬ

空晴れて風無き昼の野道行く転作田の麦伸び青し

新聞の歌壇投稿欄にその名のみ知りゐる人の名前を探す

道に散る無住の寺の大楠の葉替落葉ふみつつ行きぬ

敷石の脇に一輪スミレ咲く何処より来しか取らずに残す

赤々と草木瓜の花咲く所曲りて行きぬポストへの道

満開の

蒲郡　杉浦恵美子

桜下のベンチに伸び伸び両手足転寝してゐるひとりのをのこ

満開の桜の下に昼寝するますらを羨し定めし醍醐味

世の憂さや喧噪何処公園の桜の下の昼寝のをのこ

天守閣右手に見つつ乙川に沿ひて歩めば城の西壁

我が用は城の真下の能楽堂薄ら寒さに篝火赫赫

さて戻り乙川沿ひに十五分駐車場へと辿り着く筈

歩めども河川敷なる駐車場何処にも見えぬあれほど広きに

能舞台二人の席主が息合はせゆるゆる運ぶ双鶴手前

見つからぬあんなに広き駐車場乙川下流に日が落ち始む

迷ひ行き至りし公園遊びたる中学生らに道を尋ねぬ

もういいよ此処まで来れば分かるから別れし彼らは手を振り呉れぬ

道に迷ひ足は痛むがされどされど中学生男子の初々しさよ

驚きてやがて面白がりてゐる眼前舞ひ降るふはふは綿ごみ

その昔祖母に連れられ詣りたる賑はひまぼろし彼岸法要

お彼岸に祖母のお伴の思ひ出が今のわたしに繋がりてゐる

春の香り

大阪　伊藤忠男

声枯らし飛び跳ね手振る人の波これぞ醍醐味九回の裏

戦いを終えて互いに検討を称える姿さわやかなりや

手に汗を握る戦い他のニュースおしのけ話題野球のみなり

八十になりて目元痒くなるこれとてありや花粉症なりや

マスクして出勤いつもいつもなり見慣れた景色今も変わらず

いながらに旅を楽しむバーチャルの世界は遠くて近くなりけり

ヨセミテの美し山に滝しぶきあたかも肌を濡らす心地に

あちこちと歩き動画のネタ探し日暮れの風はまだ身に染みる

早く咲き散るも早きかあちこちに新芽の香り甘く漂う

満開の時期は過ぎたか花吹雪髪を飾るも一瞬のこと

一輪の花びら肩にそっと乗る風よけながらすり足になる

舞う桜手振り身振りの道化ぶり首をすくめていずこにか行く

窓揺らす風音耳に目を覚ます憎き一日春嵐なり

芳しき香りで気づく沈丁花迷い心を呼び覚ます花

どこからか香り漂い道外すいつもの癖とあきらめている

豆板路

豊川　白井信昭

み社の一本椿赤き花萼(がく)つけしまま落ち散らばふ

ほの暗き玄関にして黄に咲く香り水仙一つ挿しおく

改めて豆板の路庭中に瓦礫下地に敷きつめてゆく

豆板の仕切の面位置あはせ縦に五枚横に二並び

今川の人質に竹千代送られし犬飼湊跡(いぬかいみなとあと)蒲郡の塩津

三河なる三州五箇湊の一つとて年貢米をば積出し跡

豆板の仕切に沿いて平らかに大ハンマ持て突き固め

角に生へ幾千蕾芽吹けるを垣根をめぐるわがモッコウバラ

角口の擁壁の上に早きにも淡黄に一つ今年の開花

ぬばたまの夜の更けゆきて裏道に静けさ破るバイクの音

我ながら作業し過ぎか左膝痛み走りつ小糠雨ふる

腰掛けてわが両膝に幾枚もロキソプロフェンNa（ナトリウム）テープを貼る

御堂山久方ぶりに南より上がり来たれり『さがらの森』に

静もれる『さがらの森』のキャンプ場鳴き響（とよ）もす鳥の声

急斜面の崩落現場坂道にうず高くしてもろき岩石

泉下の子規の送る喝采

埼玉　矢崎直人

花粉症目薬買って帰りけり何年前の古いの捨てて

あと十分早く起きれば色々が出来る十分眠い春眠

試用期間試用延長繰り返す働く形態選べず退職

求められるここがゴールかスタートか立ち位置により変わる見え方

三ヶ月福祉施設で働いてまずは一歩で一端区切る

やめちゃえと決めれば後はスッキリとこれからのことを考え始め

四月からどう働くか学校と両立考え時間考え

刻々と変わる状況見極めて今後の事を考え始む

侍の野球躍動アメリカで泉下の子規の送る喝采

朝一の新聞広告チェックしてスーパーの野菜安売りで買ふ

お花見の誘い葉書で出しといて花は散らぬか雨で散らぬか

友達とその赤ちゃんと行く花見ベビーカー押し語らひ歩く

慣れたもの父の手つきの友をみて育児休暇の友は父たる

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

水野絹子

ＷｉＦｉの通信途切れあたふたと何も出来ずに終日呆ける

人工の両股関節そのうへに歯まで減る我サイボーグ化かも

料亭の生簀のトラフグ今日迄の生命とも知らず小フグ追ひ立てる

牧原規惠

初午の古城稲荷の祭りの日集ふ人らの未だマスクして

展示会夫の描きし水墨画マスクをはづし記念撮影

しんしんと冷えたる空の三日月に寄り添ふごとき光る星あり

子等よりは「ばあちゃんどう」と電話あり「いいよ」と言ひつつ不安隠して

この寒波に水道管が破裂する噴水のごとなす術もなく

母の髪洗へば指に光りゐる銀の数本絡みつくなり

稲吉友江

この夜半のＴＶに映るロカ岬しかと覚えゐる海の遥けきを

白鷺か真白きいくつ舞ひあがる川の辺なれどこんな街中

今はまう洋服も家具も増やすなかれ否このチェストにときめき覚ゆ

鈴木美耶子

初めての孫よりの手紙届きたり不揃ひの文字いとほしき文字

熱田の森玉砂利踏みて進みゆく清められしか神宮の前

芸術祭家康ゆかりの岡崎に我は古典の立花を生けたり

吉見幸子

カニ歩き初めて見るか一年生「麦踏み」スタイル我ら後ろ手

手をつなぎ鬼ごつこすれば声の波踏まれし麦の畝は渦を巻く

麦踏みの記念の写真に登場す手作りかかし男女六体

牧原正枝

駅舎とのお別れメッセに青春見ゆ私の胸も熱くなりつつ

誘ひくれし友のあること嬉しかりモーニングに行くいそいそと行く

久方ぶり小倉トーストのモーニング友と語らふ夢のひととき

森厚子

日差しなき冬の庭には猫もゐぬ冷たき風の通りぬけゆく
冬の朝西空に沈む満月のさえざえとして始まりゆく朝
高々と空を飛びゆく鳶たちよ冬鳥の行くその先見ゆるか

山崎俊子

茎立ちて黄花背高く咲きてゐる葉牡丹らしき道の辺に見る
鵯は長く鳴きつつ空渡る浅春の雨上がれば寒し
いつまでも明るき四月の夕暮れの仄白き桜バスに見てゆく

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

久しぶり握るラケット打つボールマスクの下は笑顔だからね

白百合学園小学校六年（東京都）　長谷部（はせべ）　葉（よう）

悲しいないつもとちがう夏休み毎年見てた長岡花火

長岡市立越路小学校六年（新潟県）　渡邉（わたなべ）　薫（かおる）

山古志の中山隧道（ずいどう）日本一手掘りのトンネルとっても長い

長岡市立山古志小学校五年（新潟県）　藤井（ふじい）　結人（ゆいと）

さつまいもホクホクあまいいいかおりやって来ましただいすきなあき

大泉学園 堺市立大泉小学校二年（大阪府）　大寶（おおたから）　優香（ゆうか）

もらったよ三角じょうぎしんぴんだつかいこなすぞかしこくなるぞ

大泉学園 堺市立大泉小学校二年（大阪府）　**川口（かわぐち）　晄太朗（こうたろう）**

一番の思い出になった運動会みんなとだから思い出なんだ

南島原市立布津小学校五年（長崎県）　**池田（いけだ）　遥翔（はると）**

白秋忌祖母の歌ひし童歌少し外れた音で覚えた

秋田県立秋田西高等学校二年（秋田県）　**鈴木（すずき）　優羽（ゆうは）**

気づいたら手に入れていた選挙権高校生が世を変えられる

福島県立平工業高等学校三年（福島県）　**小松（こまつ）　慎太郎（しんたろう）**

『俳句』

小さき手の祈りのいくつ花辛夷　植村公女

花連翹こんがらがって風抜けり

立話続いてをりぬつくづくし

風吹けばみもざは黄色バレリーナ　木村歩歩

吾ひとり月とくろぐろ野焼き跡

卒業や川辺に並び手弁当

留学に思いもよらず沈丁花

春の星亡き友笑うあのジョーク

春の湯にほのかにヒバの香りかな　今泉如雲

岩木山（おいわき）の形の皿や木の芽和

旧町名初音町とや木の芽雨
春夕焼新しき靴履き歩く
初花や友のすつかり父の顔
春の蝶桜吹雪と見まがひぬ
花吹雪赤子の眠る乳母車
はねのけし赤子のあんよ花の下

矢崎直人

銀色の蕾弾けて白木蓮
青空を向きて真白し白木蓮
九枚の花弁（かべん）と散りぬ白木蓮
上弦と下弦の真中春うらら
真地球の重力受けて桜散る
八重桜秘める思ひは秘めたまま

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

雨降りて庭の地蔵に春うごく　　精真（せいしん）

春半ば昨日は快晴今日は雨

うぐいすのにくらしきほど声の良さ

水中に吹かるる如し柳鮠（やなぎはえ）

鶯の垣根伝いに鳴きにけり

花開き般若心経テラスにて

我がためによくぞ咲きたり枝をなで

道草は蝌蚪（かと）と蛙のカラス蛇

春雨は杜牧のうたう絵のままに

あさ体操みんな元気に梅の花　　篤山

ぼんぼりと千年先も桃の花　　貴山

雪解けのちらほらみえる黒き土　　紀山

往き交ひて袖ふれ合ふも桜花
四段目の花も咲きそむ仏の座
神の酒少しいただく春うらら
一歩ゆく一歩近づくかぎろひに
ひとひらの花びら浮かす献称！
耳寄せて三味線草のペンペンペン
春の日の暮れゆかぬ間に帰らむよ　　由利

五感を澄ませば（11）

杉浦恵美子

余韻縹渺

我が亡き夫は、せっかちな性格もあったせいか余韻というものがあまりない人でした。

共通の知人がこんなエピソードを話してくれたことがあります。

ある時、スキー場で偶然ばったり。

「やあやあ、懐かしい」とひとしきり話すと、夫は「じゃあ」とストックを一振りして、後は振り返りもせず、さっさと滑降して行ったそうです。

知人は感心したような困惑したような口振りでした。

さもありなん、と目に浮かぶようでした。例えばお寺の鐘が

「ゴーン」と鳴るのに対して

「カンッ」という感じ。そんなことを思い出しながら「余韻」ということについて考えてみました。

それは最近「余韻縹渺」という四字熟語を眺めていたとき、ふと縹渺（ほんのりかすかにみえるさま）の「縹」という漢字はどういう意味？と思ったのがきっかけです。

辞書で調べてみました。

はなだ「縹・花田」①「はなだいろ（縹色）の略」→①藍染めの紺に近い色。はないろ。

因みに「花色衣」という語があり、②はなだ色の着物。薄藍色に染めた衣服。露草の花などで染めた。とありました。

（『国語大辞典』小学館）

なるほど。「縹」とは、日本の伝統的な色名のひとつだったんですね。そこでもう少し色について調べてみました。

「縹色とは、古くから知られた藍染めの色名で、藍色よりも薄く浅葱色よりも濃い色のことです。古くははなだ色、平安時代は縹色、江戸時代は花色と色名を変えて伝わってきました。『日本書紀』には既に『深縹』『浅縹』の服色名が見られます。

平安時代の格式『延喜式』では藍と黄檗で染められる『藍』に対して、藍だけで染める縹が区別されています。（中略）『花田』と書かれたり『花色』とも呼ばれるのは、かつて月草（＊露草の古称）の花の青汁で摺染をしたことに由来しています。」

（『伝統色のいろは』ウェブサイト）

ついでに青系の伝統色の名には、他にも瑠璃色、空色、水色、浅葱色、納戸色など作歌に使えそうな魅力的なものが沢山あります。

随分脱線してしまいました。

実は、「余韻」の「音の消えた後まで残る響き」という意味を「縹」という色で表現している点に興味を覚えたからなのです。

つまり「余韻縹渺」とは、「余韻がかすかに淡い藍色に残っているさま」ということになるでしょうか。

縹色は、時刻で言うとわたしのイメージでは夕暮れ、薄暮、黄昏、逢魔が時。

「新古今三夕の歌」にも代表されるように、（もっとも秋には限りませんが）夕暮れどきには言い知れぬ哀愁があると思います。

ですから「余韻縹渺」という四字熟語には寂寥感がつきまとっているような気がします。

またまた脱線してしまいました。

「音」を「色」で表現した古い日本語の奥深さについて考えてみたかったのでした。

そうそう「真っ赤な嘘」なんていう語も強烈な赤色のイメージと共に「何で赤なんだろう」と思ったことがあります。

さて、私たちは暮しの中で「余韻に浸る」ことでどれほど楽しんだり、潤ったりしているでしょうか。

最近など侍ジャパンのＷＢＣ優勝によって余韻に浸るどころか日本国中連日余韻浸け状態。

もちろん素晴らしいことではありますが、こちらは歌には作り難いだろうなと思ったりもします。

やはり余韻には縹渺こそ相応しいと言えるでしょうか。

我が夫は滑走し続け行きにけり急斜面なぞものともせずに

附　録（十一）

矢　崎　直　人

【花見】

お花見の誘い葉書で出しといて花は散らぬか雨で散らぬか

私がジョギングをしている公園の桜が見頃を迎えました。そこで、近所に住む中学の同級生の友達を花見に誘いました。コロナ禍でしばらくあっていなかったので葉書を出しました。桜は咲きはじめてから一週間ほどで散ります。花見に行く前に散ってしまうのではないかと思いましたが、雨が降って、気温が低かったので無事にお花見に行けました。

初花や友のすつかり父の顔

結婚し第一子をもうけ現在育児休暇中の友達は、外出する奥さんに代わり泣いている赤ちゃんにミルクをあげて、リュックにベビー用品を入れると一緒に公園に出かけました。

友達とその赤ちゃんと行く花見ベビーカー押し語らひ歩く

ベビーカーをゆっくり押しながら公園まで歩く時間は話ながら歩くのにちょうどいい時間でした。私は、さいたまに帰ってきてから福祉の資格を取ろうと学校に行くことや、福祉施設で働いていたこと、今は退職してまた次を

探していることを話しました。
育児休暇中で子育てには慣れてきたとはいえ、仕事よりも大変だし、全然休暇ではない、自分がやりたい事や勉強なんか全然出来ないと、友達は笑っていました。

慣れたもの父の手つきの友をみて育児休暇の友は父たる

公園の桜は満開で暖かく春の蝶が舞い、時々吹く風に舞う桜が花吹雪となってとても美しかったです。

春の蝶桜吹雪と見まがひぬ

私の俳句の趣味に付き合せ、友達に一句詠めと紙と鉛筆を渡しました。奥さんからも子どもの句を詠めといわれているがなかなかできないと難しい顔をしていました。

花吹雪赤子の眠る乳母車

赤ちゃんはお腹いっぱいになったのか、友達の家を出てから公園で花見をしてから家に帰るまで眠っていました。時々瞬きをして何か声を発してはまた眠ってしまいます。
友達の家に帰ってからの赤ちゃんはすっかり目を覚まし外出から帰ってきた奥さんとよく笑っていました。赤ちゃんのタオルを跳ねのけるあしの力が強くて驚きました。

はねのけし赤子のあんよ花の下

『老い　について』

中屋保之

「・・・」あれ？好きな女優さんの名前がすぐに出てこない、顔は浮かんでいるのに！

最近、この類（たぐい）の出来事が増えているように思える。〝どっこいしょ〟と、腰を上げた途端に〝おや、何んのために腰をあげたんだっけ〟暫しそのままの姿勢で時間が経過する。で、その直前の行動を思い返してみる。と、〝アッ、そうだ、○○がしたかったんだった〟と思い出してホッとする。そして、『老い』を自覚する今日この頃なのである。もうひとつ、人さまとの会話で同じことを何度も繰り返している自分に気づき、慌てて取り繕っていることも多くなってきた。気づくだけましだ、と自分を慰めている。

江戸期臨済宗の高僧仙厓義梵（駿河の白隠、越後の良寛、博多の仙厓と並び称された）は、「老人六歌仙」で老人の特性を、洒脱な画とともにこう詠んでいる。

皺がよる　黒子ができる
　腰曲がる　頭はげる　ひげ白くなる
手は震う　足はよろつく　歯は抜ける
　耳は間こえず　目は疎くなる
身に添うは　頭巾襟巻　杖眼鏡
　たんぽ温石　尿瓶孫の手
聞きたがる　死にともながる　淋しがる
　心は曲がる　欲深くなる

くどくなる　気短くなる　愚痴になる
出しゃばりたがる　世話焼きたがる
またしても　同じ話に　子を褒める
達者自慢に　人は嫌がる

あれ?俺、これやっちゃてる!うんうんと頷きながら、とくに最後の箇所は身につまされる。「朱に交」わっても赤くならないよう、凛とした老人で居たいと思う。
以前、どこかの温泉地で見たお土産用の手ぬぐいに曰く、

人生は山坂多い旅の道
還暦 六十歳で お迎えが来た時は、ただいま留守と云え
古希 七十歳で お迎えが来た時は、まだまだ早いと云え
喜寿 七十七歳でお迎えが来た時は、せくな老楽これからよと云え
傘寿 八十歳で お迎えが来た時は、なんのまだまだ役に立つと云え
米寿 八十八歳でお迎えが来た時は、もう少しお米を食べてからと云え
卒寿 九十歳で お迎えが来た時は、そう急がずともよいと云え
白寿 九十九歳でお迎えが来た時は、頃を見てこちらからボチボチ行くと云え

幸い、趣味の詩吟では「暗譜」といって、詩文を諳んじる訓練を要求されるため、記憶力の衰え防止には効果ありと思い定めて勤しんでいる。因みに、「吉永小百合」さんは忘れない、絶対に!

楽しい時間　126

2023年3月31日

山本紀久雄

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十一

明治天皇が東京に戻って、以前の宮廷生活に戻ってみると、そこにはいつも変らぬ生活スタイルがあり、侍従としての鉄舟が身近に仕えている姿を当然ながら見る。

人は皆、ある時期、旅をすることで、家元を離れ、多くの見聞を広げ、それを持ちつつ本来の生活環境に戻っていくが、その時何を感じるであろうか。

多分、戻った環境を改めて見直すことで、今までの生活の場が変わっていないことに気づくとともに、改めて変化がないことに新鮮な味わいを持つのではないか。

旅先での変化に富む行動スタイルから、落ち着きのある自らの拠点に戻って、以前と同じ環境下におさまった自分を見つめ直し、ここが自分の本来の居所であると確認するという意味である。このような体験を我々は旅から帰った時に感じる。

明治天皇も同じである。皇居に戻り、身近にいつも位置する鉄舟を改めて見つめ、その鉄舟が修行の毎日を過ごしている姿、そこに何かを感じたはず。

この時期、鉄舟はどのような修行をしていたのか。侍従になる9年前の文久3年（1863）浅利又七郎義明と立ち合い、見事な完敗を喫し、その後もどうしても浅利に勝てなく、この壁を超えるには「心の修行しかない」と禅修行に没入邁進していた時であった。

その禅修行は、静岡県の三島龍択寺への参禅であった。当時、宮内省は二と六がつく日が休みだった。そこで十と五の日に夕食をすますと、握り飯を腰に下げて、草鞋がけで歩いて行った。この参禅は三年続いた。（「おれの師匠」小倉鉄樹著　島津書房　2001年刊）

剣で浅利又七郎に勝つため、普通人では不可能な厳しい心の修行を行いながら、明治天皇の傍近くに仕えていた過程で、明治13年（1880）3月30日に「大悟」し、ここに「無敵の極処を得たり」を自覚した。

剣道の究極の命題は、お互いに向き合った隔離態勢で、自分が身につけている技を何時でも何処でもどのようにでも自由自在に発揮するためにはどうすればよいのか、ということに尽きる。（参照『剣道　その歴史と技法』大保木輝雄著　日本武道館　2022年刊）

この命題に対し、剣・禅・書の修行通じて答えを出したのが鉄舟であった。

鉄舟の弟子で「昭和の剣聖」と称された高野佐三郎（文久2年1862～昭和25年1950年　下写真）は、鉄舟との稽古について、次のように語っている。

『剣道　その歴史と技法』から、記述が長いが以下紹介する。

《山岡先生に稽古して頂くと、気で押される。正面を撃っても打った気持がしないといふのがそれである。却って「お前はまだ幼稚だぞ、理屈を知らない」といはれてゐるやうで、これが形で負けて心で勝つといふことで、それを誤解して、山岡先生の稽古はボカボカ、ボカボカ初心の者にでも打たれるやうに考へている居る人もあるが、打たれて居る山岡

先生の胎では、「そんなことは竹刀棒の盲打、打くらではそんなことが出来るけれども、眞剣ぢや出来ない。眞剣で瞬間に勝負をつける時にはそんなことは出来ない」といふので、今の、形で負けても心ぢや決して負けてゐない。またお前等は幼稚だぞといふ意味なんです。山岡先生などのは、本當に長竹刀で練つて練つて練り上げて、心の修行をするために短くしたのですから（筆者注　竹刀の長さは講武所で三尺八寸と決めたが、鉄舟の無刀流では三尺三寸としていた）、形だけ山岡流を真似たのとは違ふ。眞に長い竹刀で練り上げて、禪剣一致した先生ですから、剣道を禪學の上から表して、打つ打たれる、敵もなく我もなく、無我無心の三昧に入つた稽古を使つて居られるので、いくら形の上で頑張つても駄目ですね。山岡先生の稽古は柔らかいものでした。よく山岡先生の真似をする人々が、竹刀の重いやつで肩を怒らしてポンポンやって、それで山岡流と思って居るが、そんなものではなかった。長いのから練り上げたのですから、スラリスラリと、私共打てるけれども、打つても打つた気がしない、一尺位離れて居つても、先生が剣尖をピリッと動かされると、此方はもう突かれたやうな気がします》

この鉄舟、剣の道は何を目的にしていたのか。安政5年（1858）7月、22歳の鉄舟は「修身要領」を記し、次のように述べている。

《世人剣法を修むるの要は、恐らくは敵を切らんが為めの思ひなるべし。余の剣法を修むるや然らず。余は此法の呼吸に於て神妙の理に悟入せんと欲するにあり》

《余の剣法を学ぶは、偏に心胆練磨の術を積み、心を明めて以て己れ亦天地と同根一体の理、果して釈然たるの境に到達せんとするにあるのみ》

つまり、鉄舟の剣修業は目的が明確であり、それは自らの心内部の問題であり、自己心胆練磨であった。ここが明治天皇が求め悩み求めているものとは異なる。明治天皇と鉄舟は立場が違う。天皇は国家運営の責任者としての自己を鍛える必要があり、鉄舟は剣の道を究めるための自己を鍛える修行であった。

ということは、鉄舟は西郷に代わる明治天皇のサポート役としてはなり得ない。

しかし、明治天皇という人物の個性について検討していくと鉄舟と重なる部分がある。そのことについて解説したい。それをドナルド・キーン著『明治天皇・上巻』（新潮社　2001年刊）からひろってみる。

《明治天皇が抜群の記憶力の持主であったという事実は動かない。天皇は明らかに、いわゆる知識人ではなかった。天皇を知る者たちの思い出話からは、むしろ次の論語の一節が思い起こされる。「剛毅木訥仁に近し」。意志が強く、容易に屈することなく、無欲で、飾りけのないこと、これ即ち、孔子の理想である仁に近い、というのである》

ドナルド・キーンがいう孔子の人物像に近似した人物として、誰を想起されるだろうか。それは、明らかに鉄舟である。鉄舟は悟りの境地へ辿りつくため厳しい修行を自らに課し、大悟した後も、その生涯を修行者として生き抜いた姿は「剛毅朴訥仁に近し」そのものであった。明治天皇のイメージ像と、鉄舟の生き様は重なり合う。

多分、天皇は鉄舟の背中から多くの学びを得て、それを身につけていかれたのだと思う。

明治天皇は、人に頼らず、自らの内部に、天皇として国家運営にあたって必要不可欠な「判断基準を構築する」ことが自らの任務となり、後年、天皇はこの「判断基準を自ら創り上げ」、それに基づく政治関与を続け、見事な明治政府を構築した。

そのことを伊藤之雄著『明治天皇』（ミネルヴァ書房　2006年刊）が次のように述べる。

《1890年（明治23年）代以降に絶妙の政治関与を行っていた》と。

次号も続ける。

『酔いの徒然』（一三三）

丸山酔宵子

『京都の桜』

目黒川の染井吉野の蕾が開くころ、自宅近くの呑川遊歩道の片隅に咲く河津桜は勿論、緋寒桜ももう既に咲き誇っていて、遊歩道の大半を占める染井吉野の開花を待っている。

河津咲き緋寒隣で染井待つ
酔宵子

そんな東京を後にして京都の3月19日、河原町三条のホテル前、木屋町高瀬川沿いの染井吉野は既に五分咲きである。

高瀬川の両岸に続く飲食店の明かりが川面にキラキラ輝いている。

春休みも重なり、かなりの観光客に溢れているが、その半数は外国人で、アイフォン片手に、橋の上から高瀬川をバックに「オー・ワンダフル！　チンツァィデー（精彩的）」などと叫びながら撮影に没頭している。

花びらが川面に映える高瀬川
酔宵子

河原町から鴨川沿に祇園に向かって歩くと、途中に落ち着いたお茶屋が並ぶ祇園白川がある。

白川は比叡山から流れ出た湧水が、平安神宮付近で琵琶湖疎水と合流しながら分岐し、祇園を横切って鴨川へと流れ込んでいる。その白川の川辺には枝垂れ桜や染井吉野が満開に近い花盛りでお茶屋から漏れる光に照らされている。

かにかくに祇園はこいし
寝ぬるときも
枕のしたを水のながるる
吉井勇

この歌はこよなく酒を愛した歌人吉井勇が足繁く通った、今は無き名店お茶屋「大友」の跡に立っている「かにかくにの石碑」である。

京都の桜の見ごろは、例年3月中旬に差し掛かると京都御所の今出川御門から入ってすぐの近衛邸跡の糸桜（枝垂れ桜の一種）で、糸のように細く繊細な花が咲き

はじめる。
今年の京都の桜は例年より早く咲き始めたようで、高瀬川、白川も咲き誇っている状態であるから、秀吉ゆかりの醍醐寺あたりはもう見ごろであるかもしれない。仁和寺の御室桜は未だ蕾で、4月を待たなければならないようだ。

御所塀の中に枝垂れの糸桜
酔宵子

ところで、京都は「春は桜」「秋は紅葉」が似合うが、「春の椿」も捨てがたい風情がある。
銀閣寺から南禅寺に続く疎水に沿った小道「哲学の道」には、桜も美しいが、ところどころに椿が鮮やかに咲いている。
南禅寺に向かう丁度中ごろに、「椿の寺」として有名な「霊鑑寺」がある。
通常公開はしていないが、本年は3月18日から4月9日までの特別公開である。
承応3（1654）年　後水尾（ごみずのお）天皇の皇女・多利宮（たりのみや）を開基として創建され、歴代皇女が住職を務めた尼門跡寺院である。
後水尾天皇が椿を好まれたことから、広い庭内には100種以上の椿が植えられており、日光（じっこう）椿、散椿、白牡丹椿、舞鶴椿などが色とりどりに咲き誇っている。
霊鑑寺の庭園には杉苔が地面を覆い、立石を用いた大胆な石組みの庭に椿の花が優雅に咲き誇っている。
その敷き詰められた杉苔の上に、椿の花が花首からそっくり落ちていて、まだそのまま生き続けているよう。椿は決して花びらは散らさず、花首からそっくり落下するのである。
「椿」と「山茶花」はよく似ていて、両者ともツバキ科ツバキ属の常緑樹である。しかし、椿と山茶花の決定的な違いは、花の散り方である。
椿の花は花首からそっくり、ぽとりと落ちるのに対して、山茶花の花は花びらを散らせながら落ちるのである。

杉苔を覆う紅落（くれない）椿
酔宵子

花が咲いてる

高橋育郎

春は桜の　花ざかり
すみれ　タンポポ　れんげそう
菜の花畑に　おぼろ月
鐘が静かに　鳴っている

夏は朝顔　おはようさん
せいたかのっぽの　ヒマワリさん
おてんとさまと　にらめっこ
ほおずき鳴らす子　かわいいな

秋はりんどう　おみなえし
きれいな花よ　菊の花
すすきを飾る　満月に
うさぎの餅つき　ぺったんこ

冬は舞い散る　雪の花
つばき　すいせん　ふくじゅそう
雪割草が　春を呼ぶ
学校帰りに　梅の花

桜を讃える

高　橋　育　郎

桜はただひたすらに美しく咲いています
そこには何の驕りもへつらいもなく
ただひたすらに美しさを求めて咲き誇る
のです
人はそこに価値を見出し素直に褒め讃え
そして喜びあいます
その素直で純な心が平和を生み出すのです
桜は平和の贈り物　神の恵み

桜を讃えよう
世界中の人々が桜を褒め讃えあう
その心が平和を生みだす力になるのです
おお桜よ　お前は何と美しい
桜の美しさを素直に讃えあいましょう
そして喜びあいましょう
その心が平和を生みだすのです

絹の話（150）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

十二単と能装束と歌舞伎衣装

絹の話を書く中で十二単、能装束、歌舞伎衣装はどうしても触れておかなければならないテーマです。

それらのいずれも織り、刺繍、箔押し、染色、文様、男女着者、演目等々知らない事ばかりで手を付ける事が出来ませんでした。それでもそれぞれの一番上に着用するものを少し探ってみたいと思います。

日本の絹産業の発展の歴史

十二単の出現は日本の絹産業（特に織物）と和装の成り立ちを物語っています。日本の養蚕は弥生時代初期より紬糸で織物を作って来ましたが、3世紀頃から中国大陸や朝鮮半島との交流が盛んになり、生糸の文化がもたらされ、律令制による朝服制度の確立で、上質で均一な絹染織物が大量に必要となり、4世紀～7世紀にかけて日本の朝廷は中国の機織り集団（秦氏、服部氏、呉服部氏など）を高句麗など経由で幾度も招聘して、やっと平安時代初期に唐と同程度の和製絹織物の完成に至りました。それは十二単に象徴されています。

唐衣と唐織

十二単の一番上に着る唐衣とは地紋を織り込んだ短いベストの様な羽織で、その下には表着、打着、五衣、単と重ねて着ます。五枚色違いを重ねて着る五衣は「襲の色目」と言われ、季節の移りを表現し、着る人の教養趣味をアピールする部分でもありました。

能装束の唐織は縦糸に生経（未精練の絹糸）緯糸（水に浸した練糸）で織られる綾織で、広い所で客に見せる為、太い色糸や金糸銀糸を刺繍の様な立体浮織にし、さらに摺箔（金銀の箔を生地に模様の様に貼る）などを施した女性役の豪華絢爛な上着です。

十二単の時代から300年以上過ぎて流行し始めた能を演ずる時も上に着る女性の衣裳は国産であっても唐織と言い習わされている事を考えると、当時は唐と言えば高級品をイメージしたものであったと思われます。

装束と衣装

能の始まりは奈良時代中国から伝わった「散楽」と言われる市井の色々な踊りで、質素な衣類から発展し、平安時代に貴族の文化と合流し、室町時代の将軍の庇護を受け、観阿弥、世阿弥、音阿弥などによって大成され、

能の持つ一期一会的精神性は武士社会に受け入れられ、大名も自藩に能役者を抱え、報酬として将軍や大名がきらびやかな衣裳を下賜し、それを着用して能を演ずる様になり、身分の高い人や神主が正式な場所で着用する着衣と同じように「装束」と言われる様になりました。

歌舞伎は江戸時代初期、出雲の国の阿国が京都で能舞台をまねた仮舞台で念仏踊りの歌舞や寸劇をしたのが始まりと言われ、庶民の間から発展してきたので「衣装」と区別して記されますが「衣裳」とも書かれています。

絹の艶と光

麻か絹しかない時代、照明といえばローソクか行燈、篝火で、屋内は昼間でも薄暗く存在感を示すには絹が最も優れていたのです。

生糸は桑や蚕の品種、繭の収穫の時期（春～秋）で微妙に艶や柔らかさが違い、生繭から揚げた糸と乾繭からのそれとでは糸の艶や肌触りも違います。塩蔵（塩漬）した繭からの糸の艶は赤みを帯びた行燈や篝火の下で僅かな所作の違いを表現するのに効果があるようです。

特に十二単の表着はいちばん目にとまるので表地と裏地を色鮮やかな地紋の綾織と平織りで重なった絹の光の乱反射（構造色）を引き出そうとした豪華な織物です。

表着の下に着る打着は艶を出すため砧（きぬた）で打って艶やかで柔らかにした地紋織物に鮮やかな色糸の浮き織りをした二陪織物（ふたえおりもの）（錦織）で、裏地も艶を出すために漆の板に生地を貼ってピンとした張のある生地を使ったり、糸に漆を塗り艶出しした玉虫効果を期待したものもであったと言われています。

生糸の絹は織り方、染め方、重ね方で着る人の品性を表し、演ずる人の心の中を僅かの動きで表現出来る唯一無二の素材と考えられます。

染物の発達

平安時代では貴族社会を中心に色々な技法を凝らした織物が発達し、奈良時代以前から使われてきた蝋纈（ろうけち）、夾纈（きょうけち）、纐纈（こうけち）などの染物はあまり発達せず、庶民の浸し染め程度で停滞していましたが、室町時代後期から南蛮貿易で更紗などの大胆な柄の染物がもたらされ、辻が花染に続いて友禅染などの染色の世界が開けて、江戸時代中期には庶民の経済活動が活発になり、花道や回り舞台などの仕掛けのある大きな舞台で歌舞伎が興行され、派手な色彩と大柄な文様を染め抜いた衣装で顔には隈取（くまどり）りをして、大げさな所作を演じ、花魁（おいらん）の衣裳は60kgにもなり豪華の極に至り、庶民を魅了して今日に至っています。

「江上浩二の独り言」65

江　上　浩　二

人工知能　AIの急速な発展と疑い

人工知能に関する取り組み、開発研究の歴史はかなり長い。

AI, artificial intelligence の進捗は主に計算機、コンピュータの発展開発に依存。

コンピュータシステムの高速化はデバイス部品の小型化による。

デバイスは半導体チップのみならず、周辺のパッシブ部品を含み，単体半導体チップ間、複数の半導体チップを含む特定機能を有するボード間通信も高速化されている。

ＡＩ開発のソフトウェア面でも歴史的にいき詰まりも何度かあった。

ここ数年間（２０２０年以降）で、ＡＩの一般利用という面で驚異的な事があった。

巨大ＩＴ企業や異種業種企業による巨額投資で進んだ。

画像認識や言語認識による翻訳サービスも格段の改善。

これらの新しい進行は学習・learning プロセスに大きく依存。

キーワードは machine learning (ML), deep learning (DL) である。

ＡＩを組み込んだロボットを含み、ＡＩアプリが従来の雇用を奪い取るという懸念。

単純作業はどんどんなくなっている？

本当にそうなのか？

歴史的にみると何もＡＩのない時代にも、消滅した雇用と新たに生まれた雇用がある、

GPT-3, GPT-4, ChatGPT という自動文章生成ＡＩ

Chat とは所謂短い言葉で相手とやり取りするチャットのことである。

GPT とは generative pre-trained transformer のことで、文章を生成する事前学習された変換装置を意味する。

GPT に続く数字は GPT のバージョン番号で３世代と４世代では ML で参照させているデータベースの規模が格段と増大している。

GPT4ではデータがビジュアルであると説明されていて、テキストデータではなく、写真だったり、手書きのメモ（これから文字を自動的に読み取り、文として認識するとか）、写真の一部に写っている物を指定すると自動的に猫の顔だとか電気自動車とか認識する機能が備わっているという。

データマイニングと何が違う。テキストマイニングと何処が異なる。

という疑問も沸くがマイニングは分析的で、GPTは前の文に続く後の文を予測生成する。

ネットでよくみられる、チャット式質問があるが、これは場合分けしてツリー状にしたものでＡＩといって少々だまし気味な所もあるが、プログラム化されてはいるが本当のＡＩではない。

２０２３年3月18日に閲覧したYouTube(YT)は刺激的。言語生成、文書作成ができるChatGPT4の解説であった。

質問者が質問した疑問に対して、ＡＩが回答した文章が長かった。

それに対して、質問者がもっとリズミックな感じにしてと要求した。

すると、ＡＩは見た目英語だが、短いフレーズで箇条書き様に構成された文章で答え直したのである。

そうだ、日本語で大切な和歌・俳句は究極の５７５７７という、短いフレーズとリズム感を兼ね備えた表現で、我々が、人の生き様という和風文化の経験を積み重ねたものである。日本語の特有さとデータベースが英語と比べて非常に小さいのでChatGPTの日本語による回答はまだまだ未熟だそうだ。

以上、全て私の作成した言葉・文章であることをお断りしておきたい。

注：気になるのだが、欧米のある国レベルで、ChatGPTの利用禁止がメディアで報じられている。理由は個人情報保護上の問題らしい。4月1日のエイプリルフールかと思ったが、まだ日付けは3月内。

令和５年４月１日記す

初狩便り（18）

花野みぷり

田植機

田植機は、稲の苗を水田に移植する農業機械だ。田んぼの大きさで機械の大きさも変わり、大きいものは十条（列）植えまである。私たちの田んぼは、小さな棚田なので、小回りの利く三条植えの田植機を使っている。一年に一度の出番で、たぶん十五年ほど故障もトラブルもなく働いている。

田植機は、泥田を進みながら植え付け爪で、苗箱から苗を四・五本スピーディーに掻き取って挟み持ち、リズミカルに田の土に植え込んでいく。田植機は１９９０年代以降に、普及が進み、日本のほとんどの田は田植機によって田植えされている。田植機も時代の波に乗り、大規模な田んぼでは、ＧＰＳを活用した無人の田植機も活躍しているとか。

薫風のなか、田植機に乗って作業する姿は、優雅に見えるが、実は、真っ直ぐに植えることに、神経を集中している。曲がってしまったら、その後の田草取りと稲刈りに余分な労力を強いられるからだ。

とは言え、山々の緑は日々濃くなり、畔にはさまざまな花が咲き、寒くも暑くもないこの美しい季節に、田植ができることは、なにものにも代えがたい幸福感がある。

（写真：菅野昌英）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2023年3月27日

黄砂

ここ数日は梅雨の様な天気でしたね
患者さんからいただいた　紫陽花も　一気に大きくなりました
今日は風が強く
ここ数日で上空から落とされた花粉も舞い
更には　黄砂　が飛んでいます
黄砂は　花粉症やアレルギー症状を悪化させるので
くれぐれも予防をしっかりやっていきましょう
イオンスプレー（ノンアルコールのもの）
も数時間おきに顔はもちろん髪の毛などにも噴霧し
紙のマスクをしている方はマスクにも噴霧しましょう
屋内に入る前に身体に付着した花粉や黄沙を掃いましょう
帰宅してからは髪についた花粉や黄沙は必ず落としましょう
空気清浄機を上手く使い室内に花粉や黄沙を持ち込まない様にしましょう
今日も笑いながら行きましょう

2023年3月31日

この時期の水分不足

今日で3月も終わりになります
年が明けて早三か月
気づけば　本田カイロのアプローチにある
チューリップが咲き始めました
花粉もミックスからヒノキに移行し
ヒノキ花粉のアレルギー反応がある方は
スギ花粉の時より強く症状が出る傾向にあります
引き続き花粉対策をしていきましょう
気温が上がり汗ばむものの
思った以上に水分補給が出来ない季節でもあります
そうしますと

便の不調
頭痛
足のつり
アレルギー症状の悪化
首　背中　腰などのぎっくり系
などがおきやすくなります
水分補給は　御自身が飲みやすい水分で大丈夫です
1日8回小便が出る量を目安に細目に飲んでいきましょう
今日も笑いながら行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「自然と都会の陰陽」

この世の万物　陰と陽
２つで一つとなりなりて
動いて・循環・進化する
万物陰が大元で　全ての土台を作り出す
新たな〝動き〟は　陽となり
進化や成長もたらして
土台の陰を変化さす

自然は陰の環境で
万物生み出し　生物（いきもの）を
育み・成長支えている
自然の環境　感覚器
視覚や嗅覚・聴覚や
皮膚の感覚刺激して
優しく本能取り戻す
宇宙や自然の流れなど
自然は大きく伝えてる

人間本性　自然と共に
循環しながら育まれる

都会は陽の環境で
人間　進化と共にあり
自然に無いもの作り出す
都会の生活　陽ばかり
快適・便利な生活は
楽して　本能失うなり
自然と触れない環境は
精神（こころ）も身体（からだ）も整わず
争い・病気が増すばかり
たまには自然の中に行き
人間本能取り戻せ

田舎で自然が多ければ、たまには都会に出てきてな
陽の環境触れてけば、現代（いま）に生きる感覚が
刺激されつつ　動きとなる
都会と自然を行き来すりゃ　人間陰陽　整うぞ
片方だけでは片手落ち
都会と田舎は２つで一つ
陰陽　２つで一つなり

「ふくらはぎは心を助く」

人の心は血のめぐり
めぐりが良ければ　心も元気
血脈ながれが要なり
血が流れる血脈にゃ
動脈・静脈ふたつあり
血が行くのと　戻るのと
２つで一つの働きよ
行って戻るが　スムーズならば
体温・代謝が良くなって
精神も身体も元気になる

胸の心臓血脈の
動脈　血流押し出して
元気に酸素や栄養を　全身末端届けるぞ
心臓生きている限り　死ぬまで働き続ける臓
命の状態左右する

戻る血静脈中通り
筋の動きで　動かされ末端・細胞組織から
二酸化炭素や老廃物　受けて戻して心肺へ
綺麗な血へと転換す

足から心へと戻る血
ふくらはぎの筋　動かせば
静脈血がポンプされ　心の負担をらしつつ
全身代謝を良くするぞ
心の余力は　生命の
余裕と安定作り出す
ふくらはぎの筋　固ければ
動いてみても　ポンプせず
血流代謝が悪くなる

毎日　ふかふか　揉みほぐし
つま先立ったり　歩いたり　動かしゃ
血は心臓に　戻りて　心の負担減り
精神も身体も楽になる

ふくらはぎは第二の心臓
心を助ける働きぞ

故郷を去らんとして作有り　横山精真

独り駅頭に立ちて　葉湾を望めば
船は停まり或いは往き　但閑閑
頻りに思う昨夜　交歓の酒
去らんとして離れ難きは　四顧の山

「船往きて　里の港の　春めける」
欲去故郷有作　令和五年二月十四日
獨立驛頭望葉灣　船停或往但閑閑
頻思昨夜交歡酒　欲去難離四顧山

（語釈）○葉湾…佐世保湾の美称。湾口は狭く奥が広がっているカエデの葉っぱの形、或いは「サ（草冠）セ（世）ホ（木）で「葉」となることからいう。○閑閑…ゆったりとのびやかな様。○交歓…うちとけてまじわる。お相手は波佐見在住の本多慶久氏。○暫且…しばし。○四顧…四方。駅から港を見て前は石岳、右は弓張り岳、左は天神山、後ろは烏帽子岳。

（通釈）佐世保駅のほとりで佐世保港を見る。船はあちこちに停泊し、行き交う船もあるが、ゆったりとした気分にさせられる。

頻りに思われるのは屈託のない愉快な昨夜の酒だ。

電車待ちのしばしの間だが、山に囲まれた故郷の景色に離れがたい思いが過ぎるのだった。

※北九州は八幡で行事を済ませ、明日は佐世保に向かおうと、その夜ホテルで「本多慶久さん」に電話を入れた。随分逡巡した結果だった。思い切ってかけると、電話を取ったのは奥さんだった。「突然で済みません、横山と申しますが、」するといきなり「ああ、横山さん！」とえらく親しげな返事だった。逆に「ええ？！どうして？」と聞くと「『ささいずみ』での横山さんでしょう！」ピンピンカンカンの短い応答で一変に幸せな明るい気分になった。

三年前、姉と「ささいずみ」で生け簀の前のカウンターに陣取り食事をした。その内、私の隣で煮魚に箸をつついている人に気付いた。本多さんだった。あまりにも美味そうな食べ方に話を交わしたら「年に一度の自分のご褒美です」と云う言葉が帰ってきた。「私も年に一度は来るんです。今度帰ったら、ご一緒しませんか」と言ったのだった。

本多さんとは年賀状のやり取りをした。「いやーお久しぶりー！電話は随分ためらったんですが、実現できるとは！」「待ってました！」彼はコロナで三年動けず、そろそろ行こうかなと思っていた矢先だったと言う。同じ団塊の世代、共通はさかな好き、酒好き、ふる里佐世保愛。こんなお付き合いもあるのかと本当に愉快だった。

編集室だより【二〇二三年三月】

今泉由利

○「荒海や佐渡に横たう天の川」芭蕉作
新潟県出雲崎にて、佐渡島を詠まれました。この俳句の詠まれた所へ、行ってみたく…上越新幹線に乗り、乗り換え…などなど…辿り着いた出雲崎。日本海を向く。雪まじりの風が強い、こんなに強い風は、はじめてのこと。目を開けていられない。厳しい寒さが、強風にあおられ…この本当のことを。しっかり自分の心身は教わったのでした。
「詩吟カルチャー」において、この俳句を、習い、吟じる日があり、出掛けて行った出雲崎での見聞が、どっと蘇った。
せめて私の心の中では暖かくお守りしたい。

○何一つ、上手に采配しないまま、日本から一番遠いということだけで、引越しをしてしまった、アルゼンチン国ブェノス・アイレス。全部のことを、自分で解決するのだ…ということに、やっと気付いた。辛うじて手に入れた、住まいに閉じ籠って絵を描いていた。何か月も。

○住まいの隣りの方が、スペイン語の先生を紹介して下さり、知り合いの画廊へ連れていって下さった。その場で、私の描きためた絵で個展をして下さることになり、何が何だかわからないうちに、主役になっていた。

○アルゼンチンに需要があり、供給がないという電子部品の工場を作ることを思いたち、それから、日本・アルゼンチンの地球一周の旅のはじまり。はじめの頃は、地球をひとまわりする回数を数えていたけれど、五十周あたりで、もう数えなくなった。

○一万メートル上空から、地球を、ずっとずっと見下ろし続け、丸さを感じる地球がしっかり頭の中に入り込み。地球を通して物事を押し計るようになってしまった。

○カイロプラクティックの先生に、身体のバランスを整えていただいて、快適に生きています。先生の玄関、受付は、先生の小学生になりたてのお子様の、工夫を凝らした作品が並べられていて、私は、この作品達に夢中です。

「三河アララギの表紙にさせて下さい」とお願いをしました。五月号から、季節に合うよう参加いただけることになりました。可愛らしい落款も押してあります。大切にします。

○地球に乗って、太陽のまわりを、もう何回まわったことでしょう。138億年前に生れた地球の上で、本当に、ここに居られることがうれしいです。大切に生きています。

第三十七回

全国短歌フォーラム in 塩尻

短歌と出会えるまち「塩尻」。短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

投稿歌募集

申込締切 6月16日(金)

■応募規定　一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首(どちらか一首でも可)
題詠「本」※投稿は自作未発表作品に限る

■投稿料　1,000円(一人あたり、一首二首同額)

■作品集代　1,000円(希望される方は投稿時にご注文下さい。)

■応募方法　所定の投稿用紙か400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号を記入し送付ください。
ホームページの応募フォームからも投稿できます。
https://tanka.shiojiri.com/
※ご連絡くだされば募集要項(投稿用紙)をお送りいたします。

■払込方法　定額小為替(郵便局で購入)を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」にお振込下さい。

■申込締切　2022年6月16日(金)(当日消印有効)

■主催　長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／全国短歌フォーラム実行委員会

■選者　佐佐木幸綱氏・永田和宏氏・小島ゆかり氏

■賞　最優秀賞・優秀賞・入選・奨励賞

■発表　作品集と全国短歌フォーラムホームページ

■申込先　〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3
全国短歌フォーラム事務局
電話 0263-52-0903(直) ファクス 0263-53-7604

～お知らせ～

近年の大会への参加状況などを踏まえ、第37回大会から、会場での大会は開催せず、書面開催とすることに決定致しました。これまで開催に御協力いただきました皆様、御参加いただきました皆様に深く感謝申し上げます。
なお、投稿歌の募集と選考、作品集の作成などにつきましては、これまでどおり行いますので、皆様からの御投稿を心よりお待ちしております。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　〇九〇-八四三四-八六四六
TEL　〇三-六七六五-五八三八

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利